

要旨集

シンポジウム

写真家 井上隆雄の視座を継ぐ

— 仏教壁画デジタルライブラリと芸術実践 —



2023年3月12日(日)

13:00▶17:00

開場 12:00~
展示 10:00~

国立民族学博物館

シンポジウム

第4セミナー室

展示

第3セミナー室



人間文化研究機構 共創先進プロジェクト (共創安楽研究)
「学術知デジタルライブラリの構築」
国立民族学博物館拠点 (X-DIPLAS)

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts - founded in 1999



Archival Research Center
Kyoto City University of Arts



京都英大は華航いたします

写真家 井上隆雄は、1970年代にインド・ラダックとミャンマー・バガンを取材し、仏教寺院壁画を中心としてその視座をフィルムにおさめた。それらの写真には、半世紀以前の壁画の情報が確かな技術で記録されている。井上隆雄の眼差しを次世代に継いでいく可能性と意義を考える。

開会挨拶：吉田 憲司 国立民族学博物館 館長 閉会挨拶：飯田 卓 国立民族学博物館 人類文明誌研究部 教授

報告 「井上隆雄写真資料のデジタルアーカイブ化支援」

石山 俊 (いしやましゅん) 国立民族学博物館 人類文明誌研究部 プロジェクト研究員



東京農業大学卒業後、環境 NGO 職員としてアフリカ、チャド共和国に4年間滞在。のち、静岡大学大学院修士課程、名古屋大学大学院博士後期課程においてアフリカ乾燥地の農耕社会・文化、草の根開発援助をテーマとした研究に取り組む。さらに、サハラ・オアシス、アラビア半島・オアシス農村を対象地域を広げ、デジタル化・データベース化画像を用いた乾燥地農村・文化の比較研究を進行中。2017年よりDiPLAS/X-DiPLAS 事業に携わる。

報告 「X-DiPLAS が構築する画像デジタルライブラリの特徴」

丸川 雄三 (まるかわ ゆうぞう) 国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 准教授



東京工業大学大学院博士後期課程(計算工学専攻)満期退学。博士(工学)。東京工業大学精密工学研究所助手、国立情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授、国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授を経て、2013年10月から現職。専門は連想情報学による文化情報発信手法の研究。これまで手掛けた主なサービスは『文化遺産オンライン』、『身装画像データベース〈近代日本の身装文化〉』、『日本アニメーション映画クラシックス』など。

報告 「井上隆雄アーカイブ活動の実践と課題」

岡田 真輝 (おかだ まさき) 京都市立芸術大学 井上隆雄写真資料アーカイブ 研究員



愛知県立芸術大学美術学部、京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程にて芸術学を専攻。修士在学中より井上隆雄アーカイブプロジェクトに参加、資料整理に携わる。2022年よりX-DiPLASから技術支援を受け井上隆雄写真資料のデジタル化を進め、デジタル上で色補正による褪色復元を試行中。

報告 「井上隆雄撮影のバガン壁画と可能性」

寺井 淳一 (てらい じゅんいち) 東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 特別研究員



ミャンマーの前近代史、特にバガン時代を専門とする。バガンを中心に南・東南アジアの遺跡を調査。主要論文に「バガン遺跡における本尊初探：11世紀-14世紀の四仏・五仏を中心に」(2019年、『アジア仏教美術論集 東南アジア』、中央公論美術出版)がある。

報告 「井上隆雄写真の活用 模写による壁画表現の再現」

正垣 雅子 (しょうがきまさこ) 京都市立芸術大学 日本画専攻 准教授



専門は日本画模写。日本および東洋の古典絵画の模写研究、日本画専攻絵画資料アーカイブに取り組む。講演：「京都市立芸術大学日本画専攻における模写の感性と思考」(芳泉文化財団10周年記念講演会2022年)「文化財保存学の模写」(広州美術学院海外名師プロジェクト2022年)作品：《讚嘆する王と妃-キジル石窟80窟壁画模写-》(龍谷ミュージアム)《維摩詰-敦煌莫高窟220窟壁画模写-》(国立民族学博物館)他。

模写制作 「井上隆雄写真を活用した仏教寺院壁画の模写-ウエッチーイン・クービャウチー寺院仏教壁画《仏伝図》を題材に」

翟 建群 (てきけんぐん) 京都市立芸術大学 日本画専攻 特任准教授



中国西安に生まれる。京都市立芸術大学日本画専攻特任准教授、中国美術家協会会員、中国工筆画学会芸術委員会委員。敦煌研究院美術所客員研究員。著作『東方岩彩絵画・翟建群』、『翟建群作品集』主な収蔵 中国美術館、陝西省歴史博物館、陝西省美術博物館、寧波市美術館など。

レクチャー動画 「概知の素材からどのように未知なる対象を比定しうるか-アルチ寺三層堂『成就者肖像集』をめぐる現状と課題」

菊谷 竜太 (きくや りゅうた) 高野山大学 密教学科 准教授



専門は、インドチベット仏教学。サンスクリット文化史、マンダローパーイカー(儀礼マニュアル群)研究、チベットにおける仏教復興運動、仏教と医療、密教図像などをテーマに研究を進めている。共編著に、菊谷竜太・滝澤克彦編『身体的実践としてのシャマニズム』がある。

モデレーター ディスカッション 「デジタルライブラリと芸術実践の可能性」

末森 薫 (すえもり かおる) 国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 准教授



博物館における資料保存・管理に関する実証的研究に携わる。また、中国甘粛省の仏教石窟、エジプトやパーレーンの考古遺跡等をフィールドとして、文化財科学、美術史・考古学の視点より研究を進めている。著書に『敦煌莫高窟と千仏図-規則性がつくる宗教空間』(2020年、法蔵館)がある。

ごあいさつ

正垣 雅子 京都市立芸術資源研究センター重点プロジェクト「美術関連資料のアーカイブ構築と活用 井上隆雄写真史料に基づいたアーカイブの実践研究」プロジェクトリーダー/京都市立芸術大学 日本画専攻 准教授

はじめは一本の電話でした。

「井上隆雄さんが遺されたラダックの本や写真がありますよ。」

ひろいのぶこ先生（染織家 京都市立芸術大学名誉教授）から連絡を受けたのは2016年秋のことです。私がラダックの仏教壁画の模写研究に取り組んでいることを思い出してくださったのでしょう。仏教美術に関心のあった私に恩師の宮本道夫先生は参考文献として、井上氏が撮影した『チベット密教壁画』（1978年 巽々堂）、『パガンの仏教壁画』（1978年 講談社）を提示してくださいましたので、「写真家 井上隆雄」の存在は心の中にはありました。

井上隆雄氏（1940年-2016年）は、1965年に京都市立美術大学工芸科塗装専攻（現在 京都市立芸術大学工芸科漆工専攻）を卒業した写真家です。井上氏の撮影は、海外の民族芸術、仏教壁画、美術作品、日本の文化、仏教、自然など多岐にわたり、「見る」を真摯に探求しました。

ひろい先生は、ご自身の修了作品展示の撮影を、工芸科の先輩である井上氏に依頼したことから縁が続いており、井上氏が遺されたものについて、母校に連絡を取るなど労を尽くしておられました。そして、作品の一部を京都市立芸術大学芸術資料館が収蔵、ポジフィルムと撮影資料は同学芸術資源研究センター（以下 芸資研）が預かり、蔵書は関心のある方に譲渡という整理が進められている中、私はアトリエを訪問しました。

井上氏のアトリエは、平安時代に遡る瓦窯跡の傍で、時折、鹿が庭に入ってくるという自然豊かな環境にありました。茶室の趣が随所に取り入れられ、フィルム箱が整然と並んだ美しいアトリエは、在りし日の写真家の気配がありました。2階にまとめられた蔵書群は、取材対象はもちろん歴史、文化、思想など多領域の関心を示していました。会ったことのない「写真家 井上隆雄」を肌で感じ、蔵書を譲っていただいたことから勝手に親しくなった気になってアトリエを辞しました。

そのこと自体忘れかけていた2018年、「ラダックの写真を見てもらえませんか。」と後輩から連絡を受けました。芸資研へ伺うと、それが井上氏のポジフィルムであることがわかりました。参考文献で見たことのある数多くのポジフィルム原板は、カメラを構えた井上氏の眼差しと時間を感じ、見る人を現場に連れていってくれるような強さがありました。

私は、日本画模写を専らにしています。先人の絵画表現を、現地で見て、自分で描くことで知り、後の人へ伝えたいという気持ちが研究活動の源です。アーカイブの専門でもない私が、たびたびの縁に導かれて井上隆雄写真資料アーカイブに携わることになったのは、約半世紀前に仏教壁画を撮影した井上氏の意味と情熱に共感しているせいでしょう。また、写真およびデジタル化は、模写とは別の伝達と保存の手段という点で好奇心もあります。

芸資研でのアーカイブ実践に伴走して感じたことは、アーカイブ作業は地道な人の手による作業の積み重ねであること、それは無機質なものではなく関わる人のアイデアも組み込まれるということでした。2021年からDiPLASの研究支援によって、デジタルアーカイブの構築は飛躍的に進み、井上隆雄写真に基づく研究基盤が整いつつあります。今回、井上隆雄写真資料に関心を寄せてくださった研究者のご専門はそれぞれですが、私と同様に写真が持つ引力を感じておられるでしょうし、写真を一緒に眺めることを通して、新しい知見が生まれる期待を抱いていると思います。アーカイブには創造の種が潜んでいると感じます。

以上、井上隆雄写真資料は、ご遺族のご理解を賜り、芸術資源としての保存と活用を目的としたアーカイブ実践が行われてきました。この度、シンポジウム開催と関連展示として井上隆雄写真資料の一部、芸術実践として壁画模写作品、アーカイブ構築とデジタルライブラリの成果等を報告いたします。DiPLASの研究支援に加え、本シンポジウム開催にご尽力賜りました国立民族学博物館をはじめ、関係者の皆様に心よりの感謝を申し上げます。

この機会に、多くの方々に井上隆雄写真の魅力とアーカイブ活動に関心を寄せていただけると幸いです。

【謝辞】

本研究は、京都市立芸術大学芸術資源研究センター重点プロジェクト（2016年-現在）、（公財）DNP文化振興財団（2018年-2021年）、JSPS科研費（JP19H01364）、京都市立芸術大学特別研究助成（2021-2022年）、地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS 2021年）、（公財）平和中島財団アジア地域重点学術研究助成（2022年）の研究助成を受けて実施しました。展示作品の一部は（公財）芳泉文化財団研究助成（2009-2010年）の成果を含みます。関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

井上隆雄写真資料のデジタルアーカイブ化支援

石山 俊 (いしやましゅん) 国立民族学博物館 人類文明誌研究部

本発表の目的は、国立民族学博物館が中核組織となつて実施されている、地域研究画像デジタルライブラリ事業におけるデジタル化および画像情報入力をはじめとした諸作業とその課題を概観したのちに、本シンポジウムの主題となる「井上隆雄写真データベース」構築作業の特徴を考察することにある。

2016年度から21年度までの6年間継続した、地域研究画像デジタルライブラリ (DiPLAS: Digital Picture Library for Area Studies) 事業を引き継ぎ、2022年度より学術知デジタルライブラリ (X-DiPLAS) 事業が開始された。

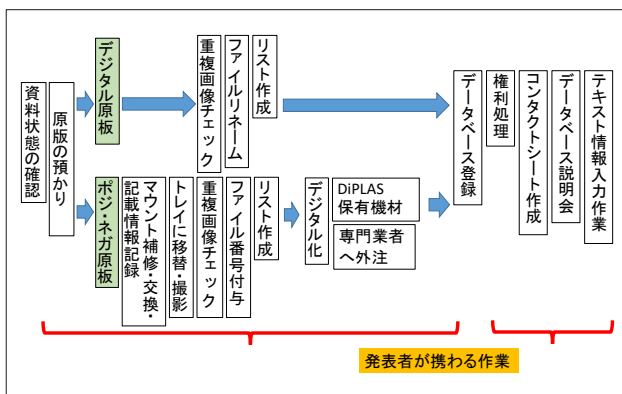
DiPLASの目的は、世界諸地域(日本を含む)において研究を展開する科研費プロジェクトに対して、写真資料のデジタル化とデータベース化による、研究の進展を支援することにあつた。それを引き継ぐX-DiPLASの目的も、デジタル化とデータベース化によって、国内の大学・研究機関に属する研究者・研究機関の研究の過程で蓄積された写真画像、映像、音声資料等の高度統合化の進捗を図ることにある。

発表者は、技術支援員として画像撮影者(あるいは申請者)とデータベースとをつなぐ役割の一端を担い(図①)、諸々の作業過程において、経験を蓄積させながら、

効率化と迅速化のために作業の標準化をめざしてきた。

デジタル化・データベース化に先立つ原稿の整理・保存状況、ネガ・ポジフィルムの場合の原稿の劣化度合(ポジマウントの湾曲等を含む)、データベースへの画像登録完了後の撮影者・申請者による文字情報入力の方法など、案件によって異なる課題を乗り越えながら、デジタルライブラリの構築が進められている。従来、原稿のデジタル化後、データベースチームへの画像引継ぎ後の作業の要点は、撮影地域、撮影時期、撮影対象物といった文字情報の入力、つまりドキュメンテーション作業にあつた。

そうしたなか、京都市立芸術大学の正垣雅子氏によって2021年度に提案された、「井上隆雄写真データベース」の諸作業における特徴のひとつは、上記のドキュメンテーション作業の組織化と、色に対する感性であつた。DiPLASにおけるそれまでの体制において、当該案件が求める色補正の段階は組み込まれていなかった。本案件から要望された色補正に対する支援は、2022年度から開始されたX-DiPLAS事業によって可能となった。データベースへの画像の登録の前に「色補正」のステップがくわわり、さらに複数の研究メンバーの協業による写真情報入力作業によって(写真①)、芸術学関連分野への研究活動に資するデータベースが構築されつつある。



図① DiPLAS 支援の流れ



写真① 研究メンバーによる協働での情報入力・色補正作業

X-DiPLAS が構築する画像デジタルライブラリの特徴

丸川 雄三（まるかわ ゆうぞう） 国立民族学博物館 人類基礎理論研究部

国立民族学博物館（民博）は、科研費による研究基盤リソース支援プログラムの中核機関として、2016年度から2021年度にかけて地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS）ⁱを推進した。DiPLASは地域研究に関する調査写真のデジタル化とデータベース化を公募により実施する支援事業であり、期間中にのべ75件の科研費プロジェクトを採択ⁱⁱした。その後、事業の一部は2022年度に立ち上げられた人間文化研究機構の共創先導プロジェクト（共創促進研究）である「学術知デジタルライブラリの構築」国立民族学博物館拠点（X-DiPLAS）ⁱⁱⁱに引き継がれ、民博では現在も写真を対象とした画像データベースの構築と公開を進めている。発表者はDiPLASおよびX-DiPLASのデータベースシステムの開発と運用に関わる立場から、これらのプロジェクトにおける画像デジタルライブラリの特徴を説明する。

DiPLASおよびX-DiPLASのデータベースシステムは、地域研究写真の画像を整理し活用するためのプラットフォームである。写真の基本情報は、原則として事前に整理・入力されたテキストをそのまま登録している。また原板がフィルム等ではなくボーンデジタルの場合には、画像データからExifなどの撮影情報を抽出し、撮影日時や撮影場所の緯度経度を抽出・登録している。さらに画像データベースが最初からできるだけ整理された使いやすい状態となるよう、基本情報をもとにインデッ

クス（索引）の生成をおこなっている。例えば撮影場所などがある程度判明している場合には、テキスト情報をもとに、撮影された国や地域の名称を索引に起こし、対応する画像データへの紐付けをする。撮影時期についても、撮影された年あるいは月単位で索引を生成する。他には事前に入力されたファイルボックス名や、画像ファイルのフォルダ名などから索引を生成し、キーワードとして登録することもある。このような整理を通して、写真画像のデータベースがより使い勝手のよい環境になるよう取り組みを続けている。

- i. 「地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS）」、<https://www.r.minpaku.ac.jp/x-diplas/diplas/>
- ii. DiPLAS「採択されたプロジェクト」、<https://www.r.minpaku.ac.jp/x-diplas/diplas/projects.html>
- iii. 人間文化研究機構 共創先導プロジェクト（共創促進研究）「学術知デジタルライブラリの構築」国立民族学博物館拠点（X-DiPLAS）、<https://www.r.minpaku.ac.jp/x-diplas/>



X-DiPLAS 公式サイト トップページ

井上隆雄アーカイブ活動の実践と課題

岡田 真輝（おかだ まき） 京都市立芸術大学 井上隆雄写真資料アーカイブ研究

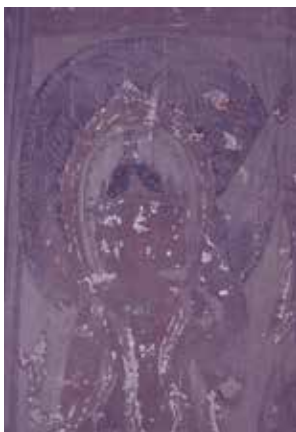
「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」は、京都市立芸術大学芸術資源研究センターにおいて2016年度より始まった「美術関連資料のアーカイブ構築と活用」と題したプロジェクトの一貫である。

初代プロジェクトリーダー山下晃平氏を中心に、資料全体を把握するための大項目でのデータベース構築が2017-2021年度までに進められ、膨大な資料群を概観する目録が作成された。本プロジェクトはアーカイブ及び資料研究に関する人や知が集積する場の形成も目的としており、データベース構築作業と並行して情報発信のための広報活動や企画展なども都度実施された。2018年度からは現プロジェクトリーダー正垣雅子氏が研究協力者として参加、インド・ラダックの仏教壁画を撮影した資料群に対する共同研究が重点的に取り組みられ、デジタル化が進められた。2022年度よりX-DiPLASから技術支援を受け、インド・ラダックの資料群に加え、ミャンマー・バガンの資料群のデジタル化と文字情報の入力大幅に進められた。本報告ではバガンの壁画資料群のアーカイブ構築を行う上で新たに組み込まれた試みと課題について言及する。

これまでにデジタル化された仏教壁画関連の資料群の多くに、程度の差はあれ経年劣化による退色が見られる。美術関連資料としての利活用の模索を図る本研究の特性上、壁画の描線や色、併記された経典の文言などの情報は、表現技法を探る上で不可欠な要素である。このためデータベースへ画像を登録する前に、色補正の作業を行うことになった。2022年度以前のデジタル化では、

使用したスキャナーに付属の退色復元機能を用いていたが、70年代に本写真資料群をもとに出版された書籍やその他の研究者が撮影した画像と見比べると、色味に無視できない違いが現れている問題が浮かび上がった。撮影した機材の設定や特徴、印刷時の色校正により、どの参考資料の色味が実際のものに近いのか、断定することは難しい。さらに本資料群は実際の壁画表現や現地の状況に加え、井上氏の撮影技術の表現が加わった画像であると言える。記録だけを目的としたものとは異なり、1枚1枚が井上氏の作品でもあるため、恣意的な編集を加えて氏の表現を損なう恐れが懸念された。今年度の作業では、資料の持つ情報の読み取りを妨げず、絵画表現として鑑賞に耐えうる色味に戻すことを目標に、一般的に知られるフィルムの退色の傾向や、原板から読み取れる客観的な情報を踏まえ、画像編集ソフトを用いて3段階に渡り方法の異なる色補正を試行した。

今後の作業では、各種フィルムの現状の分析、種類や型番の同定を行い、より明確な退色の傾向を探ることを予定している。この取り組みから得られる見地は、写真資料のデジタルアーカイブを作成する上で意義深いものであると考える。また芸術表現を学ぶ上での資料として利活用という観点から、X-DiPLASのデータベースの特徴の一つであるキーワード検索に、撮影対象物の説明として付与される具体的な尊像名や寺院名といった情報とは別に、色名や図像の形状といった要素から抽象度の高い語彙を設定し、広義の絵画表現を探るよう情報入力作業も進めていく。



色補正前の原板



第1次色補正後



第2次色補正後



第3次色補正後

井上隆雄撮影のバガン壁画と可能性

寺井 淳一（てらいじゅんいち） 東京外国語大学 大学院総合国際学研究院

ユネスコが1992年から2001年にかけて刊行したバガン遺跡の目録（Inventory of Monuments at Pagan）には、2,834もの建築遺構が載っている。そのうち痕跡も含めて壁画が確認できる建築遺構は475ほどある。井上隆雄が書いた『パガンの仏教壁画』（1978年、講談社）のあとがきによると、井上は1975年からバガンやマンダレー近辺の「代表的な約70カ寺を訪問」し、「そのうちの約55カ寺には壁画が見られた」という。今回の写真整理の依頼を受け、寺院毎にフォルダを分けて作業しているが、今のところその数は65にのぼっている。有名な寺院だけでなく、名もなき小さな寺院も訪れていたことに正直驚かされた。

本報告では、井上隆雄が遺したミャンマー関連写真の概要とその特徴を示し、井上写真が持つ価値と利活用の可能性を明らかにする。写真には風景、日常生活、伝統楽器の演奏や仏教儀礼の様子なども含まれているが、その多くは寺院壁画である。時代はバガン時代（11-13世紀）のものが多いが、ニャウンヤン時代（17-18世紀）、コンバウン時代（18-19世紀）のものも多く撮られている。バガン遺跡では、13世紀のナンダミンニャー（No.577）寺院とパヤートンズー（No.477-9）寺院が

特に多く、それぞれ200枚以上の写真がある。特徴としては、壁画全体を写したものが少なく、状態の良いものや描写が優れた部分を切り取っていることが多いことが指摘できる。そのため、一つの画題でも全体ではなく、特定の人物像のみが撮られ、寺院や壁面の特定が困難な場合がある。これは、研究者が記録を意図して撮影するのとは異なり、写真家・井上隆雄があくまで作品として壁画と向き合っていたためだろう。

写真の持つ一番の価値は、その鮮明さにある。暗い堂内でも照明を調整して何枚も撮り、高い位置にある壁画でも正対して撮られているので、現地では確認できない細部の描写までクリアに見ることができる。またバガン遺跡では、必ずしも十分な保存対策がとられておらず、壁画や浮彫の中には劣化が進んでいるものもかなりある。近年、日本を含め先進各国による遺跡の整備や修復が進んでいるが、今から半世紀近く前に撮られた井上写真は、この分野でも大いに活用できるだろう。



1077号寺院の従三十三天降下図（報告者撮影）



1077号寺院の従三十三天降下図中の月（井上隆雄撮影）

井上隆雄写真の活用 模写による壁画表現の再現

正垣 雅子 (しょうがき まさこ) 京都市立芸術大学 日本画専攻

模写は、原本が内包している美を、別の媒体に写しとることである。創作に比べ副次的な扱いを受けやすいが、写実表現の一つと考えるとじっくりくる。模写では、画家が原本の美の本質を探求し、画力を発揮し、表現に迫ろうと精励する。その過程において画家個人の創意工夫が刻まれるため、他の写実表現と同じく、原本とは別の、唯一の、絵画作品と考えるのが適切であろう。

写真は、写真家が被写体に対峙し、カメラで現象を記録したものである。感性を研ぎ澄ませて観察し、あらゆる条件を調整した上で撮影する一連行為には、写真家の意思がある。画家も写真家も「見る（観る）」ということが原点であり、その人の精神性や思想が影響する。手法や行為に違いはあるが、本質の探求という姿勢は共通する。

模写を行う際、原本から直接、または原本の傍で模写をする機会は稀で、写真を用いることが多い。模写の技法はいくつかあるが、用いる写真は原本と正対した原寸大画像が望ましい。写真は、撮影時の環境、撮影画像の精度、出力する媒体の発色等、諸々の要因で様相が違ってくる。特に撮影時の歪みと発色については留意を要する。

さらに、写真を精査して絵画化する過程で、画家は様々な判断に迫られる。線描ひとつでも、それが下描き線なのか、描き起こし線なのかという見極めや、彩色においては、色材を推定し、彩色の順序、筆の運び、水分量等、自身と手技との勘案に悩む。近年、原本と同じ素材料や

技法で描く「同素材・同技法」という模写は、合理的な実践研究として主流となっている。しかし、描く人も環境も素材も道具も、原本の制作時代と現代は、違って当然であるから、同じというのが実は難しい。それまで、模写における素材料の選択は、模写の都合を優先し、素材料・質感の再現は表現力で補っていた。画家の裁量に委ねられた模写に正解はないが、模写の精度差は存在する。

模写をする際に必要な心構えは、表現の主眼は何かという美の本質の探求である。写真家が現場で対象と対峙することと同じで、実際に原本を「見る（観る）」ことに尽きる。自分自身で美の本質を確信することが、模写制作に強さを与える。対象作品に出会うことが不可能であっても、常々、観察眼を磨き、「見る（観る）」ことで得た感覚の蓄積がある画家は、写真の精査と絵画化を柔軟に行うことができる。

このような模写は画家の理想と解釈と表現力が集約した絵画表現である。写真の上からなぞって転写したり、色・形の合致に拘りすぎたり、写真に彩色したりという作画は、写真に従順で正確という印象を与えるが、画家の感性と仕事を省いた写しに陥りやすい。我々は、複製やデジタル技術を介して、表現に接する機会が増え、経験をしていなくても「見たことある」と認知する時代に生きている。模写が「見たことある」という人の感性を揺さぶる美を備えているか、絵画表現として問われている。



《般若波羅蜜仏母》
—アルチ寺三層堂壁画模写—
紙本著色



《十一面千手千眼観音》
—サスボール石窟壁画模写—
壁下地著色

井上隆雄写真を活用した仏教寺院壁画の模写

ーウェッチーイン・クービャウチー寺院仏教壁画《仏伝図》を題材に
 翟建群 (てきけんぐん) 京都市立芸術大学 日本画専攻

今回、井上隆雄氏の写真画像を活用し、バガン遺跡にあるウェッチーイン・クービャウチー寺院の壁画模写に取り組みました。

私は、以前よりミャンマー・バガン遺跡に関心を寄せており、2008年と2016年にバガン遺跡の調査を行いました。沢山の寺院や仏塔が林立する景観、寺院内部の仏像や壁画を見て大いに感動し、いつか模写してみたいと思っていました。特に2回目の調査では、ヤンゴンで船に乗り、エーヤワディー川を遡上しバガン遺跡へ向かいました。その道中の美しさは、今でも印象に残っています。

今回、私が模写をした場面は、井上隆雄氏が1974年頃撮影した写真で、場所はバガン遺跡ウェッチーイン・クービャウチー寺院 (wetkyi-in kubyauk-gyi) の内陣南壁「仏伝図」(13世紀前半)です。私が調査した時、堂内は暗く、壁画は700年の時間の劣化や剥落がありましたが、壁画が持つ「美しさ」「情報」は直感で感じました。井上隆雄写真を最初に見た瞬間、現地で取材をした時の感覚が一致しました。私は、写生に基づく絵画制作が中心で、模写に専念する機会は多くありません。今回の模写制作では、井上隆雄氏が撮影した写真から壁画の真実性を読み取り、約700年前に壁画を描いた絵師と対話ができたと感じがあります。私にとって貴重な体験となり、いい勉強になりました。

今回の模写制作は井上隆雄写真に基づく現状模写です。模造壁の上に線描を描き、着色を行いました。一つの場面として、仏陀や尊像の視線が生きるように気を配りました。素材料の選定については、先行研究やこれまでの模写研究を参考に、正垣雅子氏と協議の上、選定しました。また、画面の最下部にビルマ語の古文字の墨文が認められたので、寺井淳一氏のご教示を頂きました。文字の形が理解できたので、筆写が可能になりました。墨文は「仏陀が大通りで立ち止まって、ダナパーという象をおとなしくするよう叱っている」という意味です。

今回の模写制作を通じて感じたことは、時代は変わっても、我々は伝統を学び、継続し、そして伝統から新しい創造へと向かうということが大事だと思いました。



バガン遺跡にて (2008年 報告者)



《仏伝図》
 ーウェッチーイン・クービャウチー寺院壁画模写ー
 壁下地着色



壁画の線描と剥落を描き起こす



模造壁に墨線を転写する



模造壁に賦彩

概知の素材からどのように未知なる対象を比定しうるか

ーアルチ寺三層堂『成就者肖像集』をめぐる現状と課題

菊谷 竜太 (きくや りゅうた) 高野山大学 密教学科

インド・ラダック地方の数ある寺院のなかでもアルチ・チョスコル (A-lci chos-'khor) と呼ばれる寺院複合体は歴史・文化的に特別な位置を占め、チベット美術史における最高到達点のひとつである。主要な五つの建物のうち「大日堂」と「三層堂」がもっとも古く、後者には 1220 年頃の銘文が見出される。

「三層堂」はその名のとおり三層からなる構造物である。南が入口で北・東・西に張り出した三つの龕室がそれぞれ中央の仏塔を取り囲むように堂宇が設計されている。三つの龕室には 4 - 5 メートルの高さの弥勒 (赤)・文殊 (黄)・観音 (白) の三菩薩立像が個別に格納され、中央は三階、龕室は二階までの吹き抜け構造となっている。二階と三階の壁面には合わせて金剛界曼荼羅を中心とした計 13 の曼荼羅が描かれている。三菩薩はいずれ

も頭冠に化仏を戴き、上半身裸で大きな花飾りを首に掛け、下半身に巻きつけたドゥーティー (腰布) には、① 仏伝図 (弥勒)、② 八十四成就者 (文殊)、③ カシミール宮廷図 (観音) の細密画が描かれる。このドゥーティに細密画をほどこす様式は一般に「リンチェンサンポ」様式と呼ばれ、カシミールからの影響とされる。大翻訳官リンチェンサンポ (958-1055) はこの地方を中心にアルチなど都合 107 ケ寺を創建したと伝えられる。

アルチ・チョスコルはその重要性から古くは高野山大学・種智院大学の合同調査隊にはじまり、最近に至るまでこれまで繰り返し大規模な調査が行われてきた。しかしながら、個別に行われた調査結果を対照し情報を総合的に共有するには未だ至っていない。なかでも、組織的な調査隊に先んじて最も早くアルチ・チョスコルを訪れ、寺院の撮影を網羅的に行った井上隆雄の写真資料の多くはこれまで有効に活用されてこなかった。

本発表ではおもに②の事例を中心として写真家・井上隆雄の資料が「三層堂」の宗教空間構造を読み解くうえで極めて重要であることを紹介するとともに、寺院複合体を調査・研究するうえで必要な「曼荼羅空間設計」という視座のもと、従来個別に行われてきた文献学・図像学・文化人類学という垣根を超えたあらたな可能性についても言及したい。

※写真は全て井上隆雄写真資料より



三層堂・文殊像



文殊ドゥーティー (腰布) 部に描かれた*八十四成就者



成就者たちの筆頭・パダンパ・サンギェー像



井上隆雄氏のアトリエにて写真資料の確認
(2016年)



芸資研重点プロジェクトでのアーカイブ作業
ラダックの撮影画像の判別作業 (2018年)



井上隆雄写真資料の保管 (旧崇仁小学校 2016-2021年)



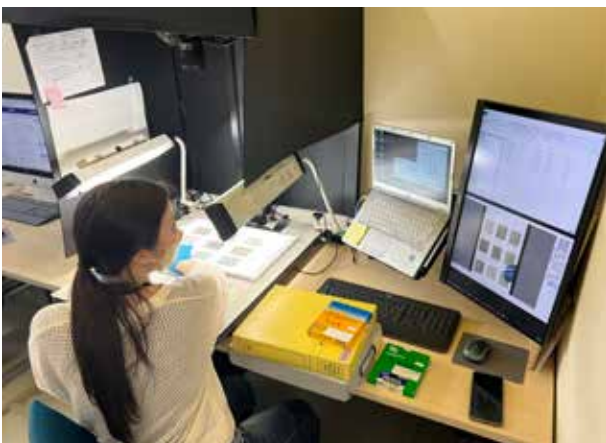
井上隆雄写真資料の保管 (旧淳風小学校 2021年 - 現在)



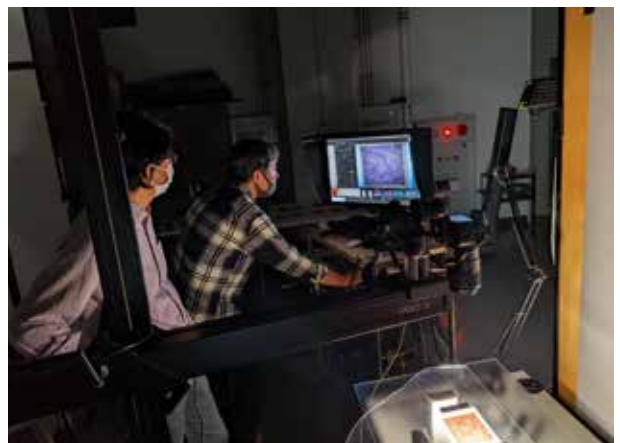
ラダック・マンギユ寺の壁画撮影 (2022年)



ラダック・サスポール石窟での壁画調査 (2022年)



X-DiPLAS 支援によるフィルムのデジタル化作業 (2022年)



フィルムの退色復元の試行 (2022年)



開催日 : 2023年3月12日(日)
主催 : 京都市立芸術大学/
人間文化研究機構 共創先導
プロジェクト共創促進研究
「学術知デジタルライブラリの構築」
国立民族学博物館拠点
会場 : 国立民族学博物館
発行 : 京都市立芸術大学
発行日 : 2023年3月10日
デザイン : 岡田真輝
印刷 : 遊文舎